

2024年2月4日 No. 3705

先週の講壇から “子どもたちは何と言っているか”

マタイ による福音書 第21章 12節～17節

聖句「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」(21:16)

1. 《具体的な》 教会幼稚園の園児たちが「こどもさんびか」の「めぐみのかみさま」を「ネズミのかみさま」と歌っていました。「讃美歌 21」の頌栄「グロリア」が「ゴリラ」や「ゴジラ」の連呼になっていたこともありました。作家の阪田寛夫は「愛国行進曲」の「見よ東海の空明けて」を「見よ父ちゃんの禿げ頭」と歌っていたそうです。子どもには、抽象（観念）を具体に変換する能力があるのです。
2. 《教える子》 アンデルセンの童話「裸の王様」では、詐欺師に騙されて「透明な衣裳」を羽織った王様の思い込みに、家臣も領民も巻き込まれてしまいます。観念に支配されて現実が見えなくなってしまうのです。その状態を現実に戻したのは小さな子どもの一言でした。「宮清め」の直後、神殿の境内で、イエスさまは障害を負った人たちを次々に癒します。ユダヤ教の律法では、心身の障害や身体欠損のある人は神殿に近づくことすら許されていませんでした。主は彼らが礼拝に参加できるように為さったのです。その奇跡を見て、同じく礼拝から排除されていた子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と拍手喝采を送ったのです。しかし、権威が脅かされていると感じた祭司長たちは、イエスさまに抗議したのです。
3. 《まなざし》 「子どもたちが何と言っているか、聞こえるか」「冒瀆も甚だしい」「放って置いて良いのか」「止めさせろ」と難癖を付けて来た祭司長に対して、イエスさまは「ああ、聞こえるとも。あんたたちこそ「詩編 8 編」の御言葉を知らないのか!」と言い放ちました。「詩編 8 編」は世界を創造された神さまの御業を賛美する詩編です。子どものような新鮮な感受性、センス・オブ・ワンダーです。裏返せば「神さまは見て居られるよ!」との宣言でもあります。アンデルセンは少年時代、落穂拾いに出かけて、農場の番人で鞭打たれそうになった時、「打つなら、お打ちなさい。神さまが見ていらっしゃるよ!」と叫んだそうです。すると、番人は顔色を無くして、鞭を降ろし、彼にお金まで恵んでくれたのでした。私たちも子どもの一声に、失いがちな人間性を取り戻す瞬間があるのです。

朝日研一朗牧師